



株式会社 明電舎

『電気のちからで明るい未来を切り開く』

古川 和彦 さん（株）明電舎 上席理事
 内藤 崇士 さん（株）明電舎 総務部 副部長
 笹本 紋子 さん（株）明電舎 経営企画本部 管理部長
 石垣 治久 さん（株）明電舎 沼津事業所 参与

私たちが秩序ある暮らしを営むための礎となる社会インフラ。明電舎は、1897年の創業から120年以上にわたり、電気の技術でその社会インフラと産業の進化を支え続けています。「より豊かな未来をひらく」を企業理念とし、人と技術で世界中の社会課題と向き合う明電舎の取り組みの中で、JEEF（ジャパンGEMSセンター）と協働する意義についてインタビューさせていただきました。



古川さん 内藤さん 笹本さん 石垣さん

- 明電舎を一言で表現するとどんな会社ですか？ また、CSRの考え方を教えてください。

〈古川〉B to Bの会社なので、皆様の目に触れるような製品は少なく、なかなか一言で語るのが難しい会社なのですが、創業は1897年（明治30年）。重宗芳水が「これからは電気の時代になる。電気で世の中を良くしたい。」という志で明電舎を創設しました。社名の謂れば、“明治の時代に電気で社会を良くする、そんな志を持った人が集まる場所（舎）”ということです。

その創業者の想い、DNAを今も受け継ぎ、「より豊かな未来をひらく」を企業理念に、おもには社会インフラ事業、産業システム事業、保守・サービス事業の3事業で活動しています。環境に配慮したものづくりへの意識などは、特に旗振りをしなくとも根付いています。社員一人ひとりが創業者の想いや企業理念を理解し、CSRを日々の仕事で実践していくということです。

- どのような経緯でJEEFと出会ったのですか？

〈古川〉創業110周年の年に、総務部が中心となり5事業所（本社、沼津、名古屋、太田、甲府）で、社会貢献活動の一環として、地域の小学校に出前授業を始めました。それが10年続き、120周年の年にはそれを続けながら新たに何かできないかと画策していました。そこで出会つ

たのがJEEFさんで、現在中学2年生に向けた理科教室『電気はどうやって私たちの所へ届くの？』を実施しているわけです。

〈笹本〉当時、はこだて未来大学のある先生との出会いがあり、120周年のプロジェクトに向けて、将来明電舎に入社してくる可能性のある中学生に対して何かできないかと相談をしたところ、その先生がジャパンGEMSセンター（JEEF内組織）と一緒にワークショップをやられていて、コンテンツ作りやワークショップの手法など力をしてくれるはずだよ、と紹介を受けたのがキッカケですね。理科離れが進んでいると言われている中、詰め込み式の授業ではなく、楽しく電気について学んでいくようなアイデアをGEMSセンターからたくさんいただけたので、これならいけるなという印象を受けました。その後、1年半くらい色々と試行錯誤しながら一緒にコンテンツを作りあげていきました。

〈内藤〉120周年のイベント事業として捉えた時、コンテンツは、子どもたちの学びに資することは当然として、明電舎のアイデンティティも伝わるようなものであってほしいと期待していました。つまり、“街の中に電気を送る仕事”が子どもたちに想起できるものであってほしかった。そういった要望にもしっかりと応えていただけたと思っています。

- 出前授業はどのように実施されているのですか？

〈内藤〉社員を巻き込む、つまり社員が講師あるいはサブスタッフをするという大前提で、120周年の時は本社と各事業所の計5ヶ所で9校の中学校に、そして現在では同時に小学校でも実施しているので、中学校に関しては3～4事業所で年間3～4校（各事業所1校程度）の実施とし、社員の大きな負担にならない範囲で継続しています。講師は社員から募りますが、スキルは重視しますね。

〈笹本〉教員資格を持っているような社員はほとんどいませんので、緊張もするでしょうし、それなりに準備は大変です。事前にGEMSセンターから研修を受け、必要な時は模範のワークショップを見学して本番に臨んでいます。

〈内藤〉子どもたちに教える意義や教え方、また授業のゴール設定などテクニックだけでなく、考え方なども教わっています。

〈古川〉講師、サブスタッフと多くの社員を投入するため、弊社の石垣が作成した授業のシナリオでも事前に研修します。

〈石垣〉沼津事業所では、市の教育委員会とも綿密に打ち合わせながら、毎年実施する学校を変えているんですよ。中学2年生2クラスぐらいの規模の学校で実施することが多いですね。



▲事前研修の様子

- 出前授業を通じて得られた成果を教えてください。

〈内藤〉電気に興味の無かった子どもたちが、手を動かし、工夫し、その喜怒哀楽を目の前で見られる。そういうた心の動きを体感できること、このような経験は会社員ではなかなかできないことですね。また、社内的にも、出前授業を通じて地域の学校とつながり、明電舎のことを知っていただくという活動を実施していることが浸透してきたと感じます。

〈古川〉子どもたちに教えることを通じて、社員もまた多くのことを学んで帰ってきます。サブスタッフを経験し

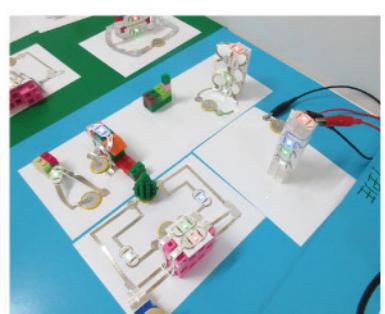
た社員が、翌年はメインの講師にというモチベーションも生まれていますね。



▲授業の様子

〈石垣〉キットを使ったワークでは、最初に線を引いて電気が点くとワーッと歓声が上がります。そして平面の回路から3次元の街づくりに進んでいくとき、回路は正しいのに電気が点かないことがしばしばあります。すぐに答えを教えてしまうのではなく、講師やサブスタッフが子どもたちと同じ目線で悩み、考えていくというプロセスがとても大事ですね。

〈笹本〉ビルの上や病院に灯りを点けようとしたとき、接触の問題等で点かない。その時、石垣さんが「これ点いたら大したもんだよ！」って声掛けしたら、その生徒は目の色変えて真剣にやり始めたんです。そして、点いたんですよ。あの時の笑顔は忘れられないですね。やってよかった！と思えた瞬間でしたね。



▲生徒の成果物

- 最後に、JEEFへの要望・期待をお聞かせください。

〈内藤〉コラボレーションは会社員としては貴重な経験。新たな気づきを生み、成長させてくれるものとなります。そういうたんなるを、他の多くの企業にも展開されるといいですね。

〈古川〉子どもたちに理科や電気に興味関心を持ってもらいたい。それと各事業所の地域との連携。これらを我々の活動の中でうまく機能させていくためにいろんな提案をいただけたのがGEMSセンター。大変感謝しています。

- ありがとうございました。

(インタビュー：2020年2月)